Voici le texte de *Menjû* étudié avec Yoko Orimo dans les ateliers qui ont lieu à l'Institut d'Etudes Bouddhiques en février-mars 2015. Menjû *(La Transmission face à face*) est traduit en français dans le *tome 7* de la Traduction intégrale du *Shôbôgenzô (La Vraie Loi, Trésor de l'œil)* de Yoko Orimo (Ed. Sully 2013) p.141. Le texte japonais ci-dessous est **à peu près** présenté en paragraphes comme dans le livre de Y. Orimo avec quelques références de pages.
Ce texte est le 51ème de l'Ancienne Édition du Shôbôgenzô [Kyûsô旧草].

正法眼蔵第五十一 面授

1.爾時釈迦牟尼仏、西天竺国霊山会上、百万衆中、拈優曇華瞬目。於時摩訶迦葉尊者、破顔微笑《爾の時に釈迦牟尼仏、西天竺国霊山会上、百万衆の中にして、優曇華を拈じて瞬目す。時に摩訶迦葉尊者、破顔微笑せり》。

釈迦牟尼仏言、吾有正法眼蔵涅槃妙心、附嘱摩訶迦葉《釈迦牟尼仏言はく、吾に正法眼蔵涅槃妙心有り、摩訶迦葉に附嘱す》。

2.これすなはち、仏々祖々、面授正法眼蔵の道理なり。七仏の正伝して迦葉尊者にいたる。迦葉尊者より二十八授して菩提達磨尊者にいたる、菩提達磨尊者、みづから震旦国に降儀して、正宗太祖普大師慧可尊者に面授す。五伝して曹谿山大鑑慧能大師にいたる。一十七授して先師大宋国慶元府太白名山天童古仏にいたる。

3.大宋宝慶元年乙酉五月一日、道元はじめて先師天童古仏を妙高台に焼香礼拝す。先師古仏はじめて道元をみる。そのとき、道元に指授面授するにいはく、仏々祖々、面授の法門現成せり。これすなはち霊山の拈華なり、嵩山の得髄なり。黄梅の伝衣なり、洞山の面授なり。これは仏祖の眼蔵面授なり。吾屋裡のみあり、餘人は夢也未見聞在なり。

4(p.143).この面授の道理は、釈迦牟尼仏まのあたり、迦葉仏の会下にして面授し、護持しきたれるがゆゑに仏祖面なり。仏面より面授せざれば、諸仏にあらざるなり。釈迦牟尼仏まのあたり、迦葉尊者をみること親附なり。阿難羅睺羅といへども、迦葉の親附におよばず。諸大菩薩といへども、迦葉の親附におよばず、迦葉尊者の座に坐することえず。世尊と迦葉と、

同坐し同衣しきたるを、一代の仏儀とせり。迦葉尊者したしく世尊の面授を面授せり、心授せり、見授せり、眼授せり。釈迦牟尼仏を供養恭敬、礼拝奉覲したてまつれり。その粉骨砕身、いく千万変といふことをしらず。自己の面目は面目にあらず、如来の面目を面授せり。

5.釈迦牟尼仏、まさしく迦葉尊者をみまします。迦葉尊者、まのあたり阿難尊者をみる。阿難尊者、まのあたり迦葉尊者の仏面を礼拝す。これ面授なり。阿難尊者この面授を住持して、商那和修を接して面授す。商那和修尊者、まさしく阿難尊者を奉覲するに、唯面与面、面授し面受す。かくのごとく代々嫡々の祖師、ともに弟子は師にまみえ、師は弟子をみるによりて面授しきたれり。一祖一師一弟としても、あひ面授せざるは、仏々祖々にあらず。たとへば、水を朝宗せしめて宗派を長ぜしめ、燈を続して光明つねならしむるに、億千万法するにも、本枝一如なるなり。また啐啄の迅機なるなり。
しかあればすなはち、まのあたり釈迦牟尼仏を、まぼりたてまつりて、一期の日夜をつめり。仏前に照臨せられたてまつりて一代の日夜をつめり。これいく無量劫を往来せりとしらず。しづかにおもひやりて随喜すべきなり。

6.釈迦牟尼仏の仏面を礼拝したてまつりし、釈迦牟尼仏の仏眼を、わがまなこにうつしたてまつり、わがまなこを仏眼にうつしたてまつりし仏眼晴なり、仏面目なり。これをあひつたへて、いまにいたるまで、一世も間断せず面授しきたれるは、この面授なり。而今の数十代の嫡々は、面々なる仏面なり。本初の仏面に面受なり。この正伝面授を礼拝する、まさしく七仏釈迦牟尼仏を礼拝したてまつるなり。迦葉尊者等の二十八仏祖を礼拝供養したてまつるなり。

7.仏祖の面目眼晴、かくのごとし。この仏祖にまみゆるは、釈迦牟尼仏等の七仏にみえたてまつるなり。仏祖したしく自己を面授する正当恁麼時な

り。面授仏の面授仏に面授するなり。葛藤をもて葛藤に面授して、さらに断絶せず。眼を開して眼に眼授し、眼受す。面授は面処の受授なり。心を拈じて心に心授し、心受す。身を現じて身を身授するなり。他方他国もこれを本祖とせり。震旦国以東、ただこの仏正伝の屋裏のみ面授面受あり、あらたに如来をみたてまつる正眼をあひつたへきたれり。

8(p.147).釈迦牟尼仏面を礼拝するとき、五十一世ならびに七仏祖宗、ならべるにあらず、つらなるにあらざれども、俱時の面授あり。一世も師をみざれば弟子にあらず、弟子をみざれば師にあらず。さだまりて、あひみあひみえて、面授しきたれり。嗣法しきたれるは、祖宗の面授処道現成なり。このゆゑに、如来の面光を直拈しきたれるなり。

9.しかあればすなはち、千年万年、百劫億劫といへども、この面授これ釈迦牟尼仏の面現成授なり。この仏祖現成せるには、世尊迦葉、五十一世、七代祖宗の影現成なり、光現成なり。身現成なり、心現成なり。失脚来なり、尖鼻来なり。一言いまだ領覧せず、半句いまだ不会せずといふとも、師すでに裏頭より弟子をみ、弟子すでに頂にんより師を拝しきたれるは、正伝の面授なり。

10.かくのごとくの面授を尊重すべきなり。わづかに心跡を心田にあらはせるがごとくならん、かならずしも太尊貴生なるべからず。
換面に面受し、廻頭に面授あらんは、面皮厚三寸なるべし、面皮薄一丈なるべし。すなはちの面皮、それ諸仏大円鏡なるべし。大円鑑を面皮とせるがゆゑに、内外無瑕翳なり。大円鑑の大円鑑を面授しきたれるなり。

11.まのあたり釈迦牟尼仏をみたてまつる正眼を正伝しきたれるは、釈迦牟尼仏よりも親曾なり。眼尖より前後三々の釈迦牟尼仏を見出現せしむるなり。かるがゆゑに、釈迦牟尼仏を、おもくしたてまつり、釈迦牟尼仏を恋慕したてまつらんは、この面授正伝をおもくし尊宗し、難値難遇の敬重

礼拝すべし。すなはち如来を礼拝したてまつるなり。如来に面授せられたてまつるなり。あらたに面授如来の正伝参学の宛然なるを拝見するは、自己なりとおもひきたりつる、自己なりとも、他己なりとも、愛惜すべきなり、護持すべきなり。

12.屋裏に正伝し、いはく、八塔を礼拝するものは、罪障解脱し、道果感得す。これ釈迦牟尼仏の道現成処を、生処に建立し、転法輪処に建立し、成道処に建立し、涅槃処に建立し、曲女城辺にのこり、菴羅衛林にのこれる、大地を成じ、大空を成ぜり。乃至声香味触法色処等に搭成せるを礼拝するによりて、道果現成す。この八塔を礼拝するを、西天竺国のあまねき勤修として、在家出家、天衆人衆、きほうて礼拝供養するなり。これすなはち一巻の経典なり。仏経はかくのごとし。いはんやまた、三十七品の法を修行して、道果を箇々生々に成就するは、釈迦牟尼仏の亙古亙今の修行修治の蹤跡を、処々の古路に流布せしめて、古今に歴然せるがゆゑに成道す。

しるべし、かの八塔の層層なる、霜華いくばくかあらたまる。風雨しばしばをかさんとすれど、空にあとせり、色にあとせるその功徳を、いまの人にをしまざること減少せず。かの根力覺道、いま修行せんとするに、煩悩あり、惑障ありといへども、修證するに、そのちからなほいまあらたなり。

13(p.151).釋迦牟尼仏の功徳、それかくのごとし。いはんやいまの面授は、かれらに比準すべからず。かの三十七品菩提分法は、かの仏面仏心、仏身仏道、仏光仏舌等を根元とせり。かの八塔の功徳聚、また仏面等を本基とせり。

14.いま學仏法の漢として、透脱の活路に行履せんに、閑靜の晝夜、つらつら思量功夫すべし、歡喜隨喜すべきなり。いはゆる、わがくにには他国よりもすぐれ、わが道はひとり無上なり。他方には、われらがごとくならざるともがらおほかり。わがくに、わが道の無上独尊なるといふは、霊山

の衆会、あまねく十方に化導すといへども、少林の正嫡まさしく震旦の教主なり。曹谿の児孫、いまに面授せり。このとき、これ仏法あらたに入泥入水の好時節なり。このとき証果せずば、いづれのときか証果せ。このとき断惑せずば、いづれのときか断惑せん。このとき作仏ならざらんは、いづれのときか作仏ならん。このとき坐仏ならざらんは、いづれのときか行仏ならん。審細の功夫なるべし。

15.釈迦牟尼仏かたじけなく迦葉尊者に附囑面授するにいはく、吾有正法眼蔵、附囑摩訶迦葉とあり。嵩山会上には、菩提達磨尊者まさしく二祖にしめしていはく、汝得吾髄。はかりしりぬ、正法眼蔵を面授し、汝得吾髄の面授なるは、ただこの面授のみなり。この正当恁麼時、なんぢがひごろの骨髄を透脱するとき、仏祖面授あり。大悟を面授し、心印を面授するも、一隅の特地なり。伝尽にあらずといへども、いまだ欠悟の道理を参究せず。

16.おほよそ仏祖大道は、唯面授面受、受面授面のみなり。さらに剰法あらず、虧闕あらず。この面授のあふにあへる自己の面目をも、随喜懽喜、信受奉行すべきなり。

17.道元、大宋宝慶元年乙酉五月一日、はじめて先師天童古仏を礼拝面授す。やや堂奥を聴許せらる。わづかに身心を脱落するに、面授を保任することありて、日本国に本来せり。

正法眼蔵第五十一

爾時寛元元年癸卯十月二十日、在越宇吉田県吉峰精舎示衆

AJOUT p. 154
Présentation et citation

仏道の面授かくのごとくなる道理をかつて見聞せず、参学なきともがらあるなかに、大宋国仁宗皇帝の御宇、景祐年中に、薦福寺の承古禅師といふものあり。

上堂に云く、雲門匡真大師、如今現在、諸人還見麼。若也見得、便是山僧同参。見麼々々。此事直須諦当始得、不可自謾《雲門匡真大師、如今現在せり、諸人還た見麼。若し也た見得ならば便ち是れ山僧と同参ならん。見麼、見麼。此の事、直に須く当に諦めて始めて得べし、自ら謾ず可からず》。

且如往古黄檗、聞百丈和尚挙馬大師下喝因縁、他因大省《且く往古の黄檗の如き、百丈和尚の馬大師下喝の因縁を挙するを聞いて、他因みに大省せり》。

百丈問ふ、子向後莫嗣大師否《子は向後に大師に嗣すること莫しや否や》。黄檗云く、某雖識大師、要且不見大師。若承嗣大師、恐喪我児孫《某は大師を識ると雖も、要且すらくは大師を見ず。若し大師に承嗣せば、恐らくは我が児孫を喪せん》。

大衆、当時馬大師遷化、未得五年。黄檗自言不見、当知、黄檗見処不円。要且祇具一隻眼、山僧即不然、識得雲門大師、亦見得雲門大師。方可承嗣雲門大師。祇如雲門、入滅已得一百餘年。如今作麼生説箇親見底道理。会麼通人達士、方可証明。眇劣之徒、心生疑謗、見得不在言之、未見舎、如今看取不。諸久立珍重《大衆よ、当時、馬大師遷化して未だ五年を得ざるに、黄檗自ら見ずと言ふ。当に知るべし、黄檗が見処不円なり。要且すらくは祇だ一隻眼を具せり。山僧は即ち然らず。雲門大師を識得し、また雲門大師を見得す。方に雲門大師を承嗣すべし。祇だ雲門の入滅の如き、已に一百餘年を得たり。如今作麼生か箇の親見底の道理を説かん。会麼。通

人達士にして方に証明すべし。眇劣の徒は心に疑謗を生ぜん。見得して之を言ふこと在らざらん。未だ見ざる者は、如今看取すや不や。請すらくは久立珍重》。

Commentaire p. 155

1.いまなんぢ雲門大師をしり、雲門大師をみることをたとひゆるすとも、雲門大師まのあたり、なんぢをみるやいまだしや。雲門大師なんぢをみずば、なんぢ承嗣雲門大師不得ならん。雲門大師未だなんぢをゆるさざるゆゑに、なんぢもまた雲門大師われをみる、といはず。しりぬ、なんぢ雲門大 師を、いまだ相見せざりといふことを。

2.七仏諸仏の過去・現在・未来に、いづれの仏祖か師資相見せざるに嗣法せる。なんぢ黄檗を見処不円といふことなかれ。なんぢいかでか黄檗の行履をはからん。黄檗の言句をはからん。黄檗は古仏なり、嗣法の究参なり。なんぢは嗣法の道理かつて夢也未見聞参学在なり。黄檗は師に嗣法せり。祖を保任せり。黄檗は師にまみえ、師をみる。なんぢはすべて師をみず、祖をしらず。自己をしらず、自己をみず。なんぢをみる師なし、なんぢ師眼いまだ参開せず。真箇なんぢ見処不円なり、嗣法未円なり。

3.なんぢしるやいなや。雲門大師はこれ黄檗の法孫なることを。なんぢいかでか百丈・黄檗の道処を測量せん。雲門大師の道処、なんぢなほ測量すべからず。百丈・黄檗の道処は、参学のちからあるもの、これを拈挙するなり。直指の落処あるもの、測量すべし。なんぢは参学なし、落処なし。しるべからず、はかるべからざるなり。

4.馬大師遷化、未得五年なるに、馬大師に嗣法せずといふ、まことにわらふにもたらず。たとひ嗣法すべくは、無量劫ののちなりとも嗣法すべし。嗣法すべからざらんは、半日なりとも須臾なりとも、嗣法すべからず。なんぢすべて仏道の日面月面をみざる暗者愚 蒙なり。

5.雲門大師入滅、已得一百餘年なれども、雲門に承嗣すといふ。なんぢにゆゆしきちからありて、雲門に承嗣するか。三歳の孩児よりはかなし。一千年ののち雲門に嗣法せんものは、なんぢに十倍せるちからあらん。

6.われいまなんぢをすくふ、しばらく話頭を参学すべし。
百丈の道取する子向後莫承嗣大師否の道取は、馬大師に嗣法せよといふにはあらぬなり。しばらくなんぢ獅子奮迅話を参学すべし。烏亀倒上樹話を参学して、進歩退歩の活路を参究すべし。嗣法に恁麼の参学力あるなり。黄檗のいふ恐喪我児孫のことば、すべてなんぢはかるべからず。我の道取および児孫の人、これたれなりとかしれる。審細に参学すべし。かくれずあらはれて道現成せり。
7.しかあるを、仏国禅師惟白といふもの、仏祖の嗣法にくらきによりて、承古を雲門の法嗣に排列せり、あやまりなるべし。晩進しらずして、承古を参学あらんとおもふことなかれ。なんぢがごとく、文字によりて嗣法すべくは、経書をみて発明するものは、みな釈迦牟尼仏に嗣法するか、さらにしかあらざるなり。経書によれる発明、かならず正師の印可をもとむるなり。

8..なんぢ承古がいふごとくには、なんぢ雲門の語録なほいまだみざるなり。雲門の語をみしともがらのみ、雲門には嗣法せり。
なんぢ自己眼をもていまだ雲門をみず、自己眼をもて自己をみず、雲門眼をもて雲門をみず、雲門眼をもて自己をみず。かくのごとくの未参究おほし。さらに草鞋を買来買去して、正師をもとめて嗣法すべし。なんぢ雲門大師に嗣すといふことなかれ。もしかくのごとくいはば、すなはち外道の流類なるべし。たとひ百丈なりとも、なんぢがいふがごとくいはば、おほきなるあやまりなるべし。